

住民向け説明会で異論続出 護るべき地域の「秘仏」とは



オホーツク管内滝上町では通算3回目となるGPI主催の説明会には、約40人の町民が参加。発言した11人からは計画に対する不安や懸念、疑問、反対意見などが相次いだ(8月25日夜、滝上町内)

グリーンパワーインベントメント(GPI・本社東京)が士別市と滝上町にまたがる上紋峠の周辺で予定する、陸上型では国内最大規模の風力発電所(風発)の建設計画。滝上町では8月25日、通算3回目となる説明会が開かれ、約40人の町民が参加した。どう懸念を軽減して開発できるか。地域貢献などについての考えも説明したい(三橋慶之GPI専務執行役員)との主旨だったが、発言した11人からは、風発による低周波音や野生動物への影響、森林伐採にともなう問題点などに対する懸念や疑問、反対意見などが相次いだ。席上、今年9月だった環境アセスメント「配慮書」の公表を来年4月以降に先送りするとの説明もあった。

(ルポライター・滝川康治)

風発の波及効果を強調しつつ 報道関係者へ資料配布は拒否

上紋峠の周辺で大型風力発電所(風発)の建設計画を進めるGPIが主催する説明会が開かれた、8月25

日夜の滝上町文化センター。会社側は案内チラシに「町外の方のご参加はご遠慮ください」と記し、町民向け資料のメディア関係者への配布は拒否するという。

参加した町民は40人ほど。雑壇に

はGPIの三橋慶之専務執行役員や関係スタッフが並び、まずは配布資料に沿って1時間余り、計画内容などの説明が進む。

質問や意見を述べた町民は11人。その全員がGPIの風発計画に対する懸念や疑問、反対の意思を口にした(後述)。後半になって、建設候補地の近くで暮らす酪農家の女性以下のように訴えると、会場から拍手が起きた。

「わたしは新規就農した18年前に風車(の計画)があったら、滝上には住

まなかった。どうして(建設地)目をつけたのかと思うと残念でがっかりします。ここには、そう思っで悲しむ者が最低4人はいることとを心に留めてほしい。『建ったら終わり』、ひとりのおばさんとして反対します!」

今回の開催理由についてGPIは、「どういう形で(住民の)懸念を軽減して開発できるか。また、地域貢献などについて考えを説明したい」(三橋専務執行役員)として、こう強調した。

「再エネ導入の拡大と地域振興は車の両輪であり、事業を進める上で一番大切と考える。地域と一体になってシナジー効果を実現したい」

そして、風発の可能性について、※上紋峠の周辺は(風発が林立する)宗谷丘陵くらの風況が望める※林業との共存が可能で、管理用の道路は森林の施業にも使える。保安林の部分解除は計画している。※工事関係の仕事のうち、可能なものは地元(の会社)に発注したい

などを挙げ、地域に対する波及効果を強調。当初は「26年6月」のちに「同9月」としてきた、環境影響評価(アセスメント)の入り口とな

る「配慮書」の公表時期については、「(地域関係者らとの)コミュニケーションを重ねて、来年4月ごろに届けたい」として、半年間ほど先送りする方針を示した。

低周波音や野生動物への影響、 森林伐採などに懸念や疑問の声

町民11人の懸念や疑問は、低周波音や風車機材などの輸送時に発生する騒音による被害、ヒグマや猛禽類への影響など自然環境についての問題点、森林の伐採にともなう影響に関するものが多かった。以下、やり取りの一端を紹介する。

——低周波音の影響によってヒグマの棲息場所が(人里近くに)移る可能性について調べるのか。因果関係が立証できないまま河川の汚染などが生じた場合、きちんと補償するのか。(基礎部分などに使う生コンクリートなどがもたらすサクル川や渚滑川への影響について、観光面も含め、どう考えるのか。

GPI側(風発の数が多い)秋田県では、都市部のほうが低周波音の発生源があるが、クマが風車を避けて暮らしているとは思えない。わたしたちは(建設による)環境影響がな

いとは考えていない。事前に調査を行ない、国の基準を下回らない事業しかできません。地元と対話し、責任を持って対応したい」

——何十年か先の子どもたちに対し、自然という財産を棄損されたツケを支払わせたくない。数年間だけの工事に喜ぶ人は少なく、(建設までの間に)混乱が起きる。御社では(住民などから)反対されて建設が中止になった事例はあるのか。

「(当社では)どの事業にも反対の声はあるが、断念した事例はない。工事案件は配布資料に載っているだけで、アセス手続きの中で(風発の)規模を絞り込む。他社の中には事業から撤退したケースはある。

——(7月に開催された)日弁連の公開学習会を視聴した際、稼働にともない頭痛や動悸などの健康被害が起きているとの話があった。風車予定地から5キロ先で酪農をしているが、家族が今後20年、30年とやる仕事なので慎重に考えている。学習会では「出力や設置数が増えると騒音も増える」との説明だったが、規模を考慮して事業化するのか。

「騒音と健康被害に関する」疫学的な研究の報告は見ている」



建設にともなう地域貢献策などを説明するGPIの三橋慶之専務執行役員(中央)



日弁連主催の大型風発などの公開学習会を延べ400人近くが視聴(7月30日、オンライン画面から)

(野鳥たち)のためになる。町内にはオジロワシも繁殖しており、この事業が内陸部でのバードストライク(BS・鳥の衝突事故)の第一号になるのでは、と心配している。

「これまで内陸部でのBSの発生はなかった。クマタカは高い標高のところには巣を作らない。風車と営巣木を離すことはできるのでは。我々も断片的な情報しかなく、調査を進め、事実に基づいて判断したい」

建設にともなう森林伐採による悪影響を懸念する声もあった。

——かなりの森林伐採が必要だが、資料には何も書かれていない。

「既存の」林道を使えるくらいの伐採は必要であり、どの程度のものになるのか今後の設計の中で確認したい。まだ、この事業をやるとは決まっていない」

——それなのに住民を集めてどうするんだ。どれくらいの規模になるのか分からずに開発するのか！

さらに、開催済みの説明会で出された、さまざまな意見に対する文書回答を求める声もあった。

一連の説明は丁寧ではあったが、核心部分になると「調査データを見てからの議論になる」「専門家の意見

も聞いて……」といった答えがくり返される。苛立つ一部の参加者からは「曖昧だ」「話がぼやっとしている」と憤る声も。また、参加者の中には賛成意見の持ち主もいたが、具体的な発言は全くなかった。

大型公共事業への期待を再現？ 売ってはならない地域の「秘仏」

今回の説明会では、建設を前提にして「固定資産税や事業税による町の自主財源の創出」「雇用の創出」「地域内の会社には建設工事やメンテナンス、資金調達など発注できるものはやりたい」といった、利益誘導とも取れる話が強調された。

筆者は、隣の下川町のサンルダム建設をめぐる、道開発局とのやり取りを続けた経験があるが、自治体や商工業者らが期待したような地域に



上紋峠近くの藻瀬狩山に設置された風況調査の観測塔

対する経済効果はなかったことをよく知っている。大型再エネ事業もまた、公共事業と同様に国策依存の歴史をくり返しているように映る。

大電力消費地ではない滝上町や土別市が、「風況が良いから……」という理由だけで大型再エネ事業の供給地として狙われる——そうした構造を根本から見直していく議論が必要な時期が訪れたのではないか。

「秘仏を売ってはいけない」という言葉がある。歴史的・精神的な価値がきわめて高いため、秘仏の安易な売買は厳に慎まれるべきだ——という意味だ。この地域にとつての「秘仏」は、天塩川の源流部やオホーツク海に注ぐ渚滑川などの河川や森林、そこに暮らす動植物や地域の産業と人といえないだろうか。

それらに対し安易に開発の手を加えず、そのまま残しておくことが現在の地域の宝(秘仏)の価値を将来さらに高めることにつながるのではないか。

※GPIは、滝上町での説明会の翌日(26日)、土別市役所で市議会議員と市職員に向け、計画案の概要を説明した。市民対象の説明会はまだ開かれていない。